



特集
土木遺産Ⅱ
時を超える技術者のこころ オーストリア

Special Features
Engineering's Heritage Ⅱ
Engineer's Feeling Surpassing the Time Austria



富永美幸
TOMINAGA Miyuki
日本交通技術株式会社
技術開発部/技術管理課

Semmering Railway ゼンメリング鉄道

アルプスを越えた世界最初の山岳鉄道

陸で最も運送量の大きい交通手段である鉄道。今や私たちの生活基盤となっているこの鉄道は、産業の原動力として、また旅行や通勤・通学など、人々が移動する手段として大きな役割を果たしている。その鉄道史において目立たずとも偉業と言えるのが、世界で初めてアルプス



越えをした山岳鉄道、『ゼンメリング鉄道』である。

低オーストリア州とシュタイアーマルク州の州境にある小さな町ゼンメリングは、標高985mのゼンメリング峠の斜面に這うように広がっている。

鉄道開設によってウィーンの人々の休暇リゾート地として開発され、峠の脇には小さなスキー場が数箇所ある。このゼンメリングの前後41.7km、グロックニッツからミュルツツーシュラクまでのオーストリア国鉄の一部が『ゼンメリング鉄道』としてユネスコ世界文化遺産に登録されている。その鉄道建設の重要性和ルートの自然の美しさは今もほとんど変わっておらず、電化や複線化、レールの強化などの改良は施されているものの、基本的には150年前と同じである。ユーロ導入前に使われていたオーストリアの20シリング紙幣にもその姿が描かれていた。

1—アルプスを越える

1841年初頭、オーストリアの内務大臣カール・フリードリッヒ・キューベックは、首都ウィーンからトリエステ(当時はオーストリアの領地で海軍の重要な軍港だった。現在はイタリア領内)までの鉄道を建設するようオーストリア国鉄に指示した。その間に位置するゼンメリング峠は



馬車でしか峠を越えられなかった。オーストリア国鉄はベニス生まれの技師カール・リッター・フォン・ゲーガに設計を託し、1842年から6年間の設計期間を経て、1848年に工事に着手した。大型機械もダイナマイトもない時代でありながら、1854年、わずか6年という歳月で、当時鉄道で行ける世界最高地点(895m)を含むルートを完成させた。

新たに建設されたこの区間には15のトンネルと16の陸橋があるが、トンネルは火薬で爆破したところを人間の手で掘り進めて行き、陸橋は近辺の山々から採石したものをレンガ風に加工して馬車で運び、全て石積みで造った。石灰岩層ということもあり掘りやすかったものの、それが災いして落石による事故や出水による事故があり、全工期合わせて1,000人を超える作業員が亡くなった。

2—自然の美しさに触れる

ゼンメリング鉄道は世界最初のアルプス越えの鉄道路線として、1998年12月世界文化遺産に登録されたが、それだけではなく、厳しくも素晴らしいアルプスの自然の美しさに容易に触れることが出来るようになったのも他では見られない魅力である。

列車から見える景色は生い茂る緑豊かな森と急峻なアルプスの山並で覆われている。春は遅く秋が早いこの一帯は、9月半ばにして既に空気が冷たく、吐く息は白い。澄んだ空気の中に限りなく広がる大自然を走り抜けていくと、身も心も洗われる気がする。

途中ゼンメリング駅で下車をして、鉄道沿いを歩くハイキングコースがある。ウィーンの人々は毎週末のように家族や友達とピクニック気分

で山登りを楽しむが、ゼンメリング駅からグロックニッツ駅まで続く道のりでは途中にいくつかの中間駅があり、電車に乗り換えたり途中下車をすることもできるので、ハイキング初心者でも十分に楽しむことができる。森を抜け、畑を抜け、線路に付かず離れずの道中では、石積みの陸橋や山に沿うように曲線を描く線路を見ることができる。140万m³の岩が破壊され、65万個のレンガと8万の切石でできているこの区間で最も高い2層の陸橋、カルテ・リンネ橋の袂に立ち、その姿を見上げてみれば、そこには大自然の中で生きてきた力強さと人々の手で造りあげたという温もりがあり、当時と変わらぬその姿に昔が偲ばれる。

〈参考文献〉
Quo Vadis Alpenschule-coachin (<http://www.semmeringalpin.a>)

- 写真1[前頁上]—線の中に堂々と立つカルテ・リンネ橋
- 写真2[前頁左下]—実際に橋で使われていた積石
- 写真3[左上]—山並みに沿って緩やかなカーブを描く石積みの橋
- 写真4[右上]—路線名となっているゼンメリング駅
- 写真5[左下]—自然の中を疾走する列車
- 写真6[右下]—周囲の緑と溶け込んで伸びる線路

(写真：1、小松豊 3、初芝成應 6、山田耕治 他、筆者)

